

## 故大塚裕史教授追悼号によせて

人の死は、それが誰であれ悲しくつらいものであるが、その人が将来を嘱望されていたならば、その思いもひとしおである。2010年4月4日、入学式が終わり、これから新年度が始まるというときに大塚裕史教授の訃報に接した。享年50歳であった。急速に病状が悪化していたことは聞いてはいたが、12月までは教壇に立ち、精力的に学内業務もこなす一方で、遺作となった「プロジェクトのマネジメント・コントロールの手法—アーンド・バリュ法的位置づけ—」を執筆して『経営志林』に発表されていた。12月末に体調を崩し、故郷の福島に帰って療養したものの、1月には一時的に復帰された。しかし、やはり療養に専念すべきだとのことから2月には入院生活に入ったが、それから2カ月あまり、突然と言うしかない知らせであった。

大塚教授は1959年11月22日、福島市に生まれた。1978年に福島高等学校を卒業されたのち福島大学経済学部に進学された。卒業後は東北大学大学院経済学研究科に進学し、管理会計を専攻された。1987年に大学院博士後期課程を退学して、いわき短期大学商経学科専任講師の職を得て会計学の教育者としてのキャリアをスタートさせている。その後、1989年に石巻専修大学経営学部に移り、1993年には助教授、そして2001年に教授になられた。この間、1997年には東北大学で博士号をとられた。博士論文は「参加型予算管理研究」であり、この論文は1998年に同文館出版から出版され、大塚教授の主著となっている。法政大学への赴任は2003年4月であり、学部では主に「原価管理論」、大学院では「管理会計論」を担当された。また、専門職大学院アカウンティング専攻でも「基本原価計算」の教鞭をとられた。さらに、2007年度には副学生部長として学生との対応に尽力し、経営学会の活動でも本誌『経営志林』の編集を担当されている。

大塚教授の専門領域は予算管理を中心とした管理会計にあったが、その研究業績については、師であるとともに同僚でもあった佐藤康男教授の追悼の辞に譲ることとし、ここではその人となりにもふれることにしたい。思い起こせば大塚さんは人なつっこい笑みを絶やさず、いつもわれわれを和ませるものをもっていらした。サクソフーンを吹き、音楽が好きな穏やかな人であった。その一方で粘り強く、緻密な点も彼の人柄の一端であるように思う。大塚さんは、2009年の経営学部創設50周年を記念し、経営学部学生の勉学に資するために企画された『経営学部生のための用語集』の編集作業をほとんど一人でこなされた。500頁を超える大部の『用語集』は、彼の粘り強く緻密な仕事なしにはとうてい完成されえなかったであろう。創設50周年の記念講演を行ったマイケル・ポーター教授に、これからは戦略的管理会計について研究するつもりだと自己紹介し、新たな研究テーマに向けて意欲を燃やしていた矢先の死であった。

研究者としての一層の飛躍を前にしてこの世を去らねばならなかった大塚さんの無念の思いはいかばかりか。法政大学経営学部としても、良き教師であり、優れた研究者であり、そして頼りがいのある同僚を失ったことは痛恨の極みである。われわれに多くの印象深い思い出を残しながらこの世を去ってしまった大塚裕史教授のご冥福を祈り、ここに追悼号を刊行する次第である。

2011年1月

法政大学経営学部長 横内正雄